

## 2 0 2 3 年 度 基 礎 演 習

教 員 名	木立 力、大矢奈美、紫関正博、藤沼 司
演 習 テ マ 指 導 分 野	<p>この基礎演習は、大学院前期課程（修士課程）に入学して、これから研究に励もうとする人たちに対して、大学院での勉強の仕方の基本を手ほどきしようとするものである。</p> <p>入学者はこれまでさまざまなキャリアを経ており、それぞれの専攻で必要とされる基礎学力にバラツキがあることが予想される。しかし、2年間あるいは1年間の短期間に成果を上げるには、勉強の仕方にも偏りがあったり、思い違いをしておいては成果があがらない。そのための共通の基盤を作ろうというのが、この演習科目の狙いである。</p> <p>経営、経済や地域の問題の研究は、観察から出発し、理論的な概念構成の検討をへて、さらに多面的な実証というプロセスをとることが多い。社会現象は複雑であるため、理論的な検討においては、分析的方法をきちんと活用するほかに、広い視野から自分の研究をすすめることができるように、これまで蓄積されたすぐれた経営や経済における思想にふれることが求められる。</p> <p>大学院生が各自の研究テーマに沿って勉強を始めるに当たって、研究方法についての基礎的な理解を得ておくのは、今後、修士論文や課題研究レポート、さらには博士論文を作成するのに大いに役立つだろうと思われる。</p>
演 習 内 容 ・ 方 法 等	<p>授業は、最初に担当者全員が集まり、この演習に対する取り組み方について説明する。次に、木立が4回連続したあと大矢が3回連続しておこない、さらに紫関が4回連続のあと、最後に藤沼が3回連続して授業する。</p> <p>木立担当の第1回目には、経営や経済に共通するレポートの書き方、引用の仕方、文献の探し方を復習する。第2回目には経済学の体系やさまざまな応用分野や近年の動向の紹介を行う。経済分析は経済問題を経済学の視点から分析するものである。第3回、第4回目では経済学の概念が、現実の経済の問題に適応される際に、どのような効果を上げ、どのような問題を生じさせるかについて、具体例を通して説明し、受講者と議論する。受講する学生には、短いレポートの提出を求める予定である。授業の材料のほとんどは事前に配布するプリントによる。</p> <p>大矢は、実証研究において、経済・社会の諸制度や文化といった知見がいかに重要であるかを考える。近年、データ活用の重要性が注目されているが、データは集めてきただけでは数値の塊にすぎない。何らかの加工・分析が必要である。詳細な統計的手段は別の科目に譲るとして、ここでは「所得格差」に関するデータを例にとり、データを正しく読むための視点について考える。多くのデータセットの中から最も自分の問題意識を「客観的に」分析できるデータを選ぶためには、まず何を知りたいのか、問題意識を明確にする必要がある。そして、分析結果が何を意味するのかを考えるためには、広い知見と冷静な分析力が不可欠である。教科書は指定せず、教員が作成した資料を用いて</p>

授業をおこなう。受講後、学生にはレポートの提出を求める。

紫関は、文書現象としての会計の視点から指導を行う。この視点の下では、会計学は、経済学とは密接な関係を有しながらも、相対的に独立した学問といえる。会計上の利益の大きさとそれに基づいて算出される税金や配当といった経済事象は、会計のメカニズムによって会計文書上に現れる。会計研究を行う際には、こうした社会的・制度的な文書現象を研究対象に据えて、その関係の解明に取り組むことが重要である。これらの点を踏まえて「会計とは何か」を意識し、制度的な文書現象としての会計の観点から、現代における会計の性質を解明すべく研究方法を修得してもらう。なお、教科書として、鈴木義夫・千葉修身著『会計研究入門―“会計はお化けだ！”―』（森山書店、2015年）を使用する。また、配布資料も用いる。受講後、学生にはレポートの提出を求める。

藤沼は、経営学という学問の性格について取り上げる。経営の問題は実践的であり、その時代の要請や課題に応えるようにして経営学は展開されてきたが、1世紀以上の歴史を経て、そこには明確な学問的基礎がある。経営学は経済学の一分科ではなく、固有の方法的立場を有している。それゆえ「経営とは何か」を基本的なところから問うことを通じて、その研究方法を掴んでいただく。そのために、経営学を歴史的流れで捉えるとともに、21世紀の課題解明に向けた方法的態度を考えていただく。参考資料は、授業時に指示する。受講後、学生には短いレポートの提出を求める予定である。